中國研究における實學的先驅

——河島醇書翰を中心として——

岡崎精郎

一

筆者の所藏文書に「在獨逸國河島醇氏書翰」の表題をもつ一文がある。[1] これは、その末尾に、

明治廿年一月二日

在獨逸國　鄉友會東京部會員　河島醇

鹿兒島鄉友會東京部　會員諸君

とあるのによつて明かなように、明治二十年(一八八七年)、當時大藏省の屬官として渡歐、大藏省關係事項、ことに煙草專賣について調査中であつた鹿兒島縣人、河島醇が、[2] 鹿兒島縣出身者を以て組織する鄉友會の東京支部へ寄せたもののコピーであるが、その內容はこの當時にあつて、きわめて注目すべきものをもつ。すなわち、

變轉氣運ハ則チ天ノ理ニシテ優勝劣敗ハ則チ物ノ常理ナリ　誰アリ之ヲ如何スルコトヲ得ン歟　方今宇內ノ形勢ニ於ル殊ニ歐洲ノ現況タルヤ恰モ春秋戰國ノ史歷ヲ見ルカ如シ

との冒頭文に始る本書翰は、直につづけて、十九世紀末ヨーロッパの諸列强露・英・佛をそれぞれ秦・齊・楚に對比したものを始めとして、ヨーロッパ各國をそれぞれ戰國時代諸雄國に相對せしめており、この比較論はおそらく、清末にみられた諸家の說に負うものとみられるが、[3] なおひきつづきこれらヨーロッパ諸强國の對外政策に論及したのち、わが國のこれら諸情勢に對應すべき方途をのべて、軍事問

題より政治組織の問題にすすみ、さらに筆をつづけて次の如くいう。

抑モ亦宇内ノ形勢ヲ其ノ事跡ニ徵スルトキハ　果テ東洋多事ナルトキハ必ス西洋無事　今ヤ西洋多事ナラントシテ　爲メニ東洋稍々無事ナルカ如シト雖モ　積年來日清韓ノ關係ハ未タ固結シテ彼我交際上ノ疑問トナリ　而シテ今ヤ清國ハ俄カニ政略中ノ方針ヲ轉シ　我ニ加フルニ威ヲ以テセントスルノ政略ヲ採ルモノノ如ク　依テ或ハ事局ヲ以テ血鐵ニ判スルノ時機免ル可ラサルノ狀アラントス

俄然、問題の焦點はヨーロッパより極東へと一轉、明治十五年（一八八二）の京城の變よりこのかた、くすぶり來つた極東紛爭の實態が抉剔される。書翰につづけていう。

素ヨリ東洋政略上ニ於ル　日清久ク相爭ヒ積テ之ヲ仇怨ト爲スカ如キハ　勿論彼我ノ得策ニ非ラスト雖モ　彼レ未タ海外ノ形勢ニ暗ク且自ラ尊大ニシテ頗ル外交ノ大局ニ濶ナリトス　於是カ我邦國ハ速ニ大計ヲ將來ニ定メ嘗テ獨逸カ舊誼ノ墺國ニ對シ自國ノ大計ヲ定ルニ　血鐵ノ政策ヲ用ヒ　墺國ト連戰スルヤ七旬終ニ戰勝ヲ得テ再ヒ墺國ト和盟シ更ニ親交ヲ厚フシ　今ヤ共ニ攻守ノ盟ヲ結ンテ陰然露國ニ備フルニ至ラシメタルノ方策ニ於ル如ク　我モ亦必ス一回血鐵ノ政策ヲ採リ　斷然清國ト戰ヒ速ニ勝利ヲ得　以テ彼ト共盟シ　我東洋將來ノ政策ヲ共計セスンハ非サルナリ　今果テ血鐵ノ政策ヲ斷行セントスルトキハ　我ニ素ヨリ先ンシテ彼ノ地理若クハ風俗人情ヲ詳悉スル所無ンハアル可ラス　況ヤ物ノ親疎ハ必ス互ニ其情ヲ通スル能ハサルノ難キニ起因ス　我國古來ヨリ支那ト交通シ且支那學ヲ以テ國學ノ一部ニ加ヘ普ク子弟ヲシテ講究セシメサルニ非ラスト雖　其學風タルヤ徒ニ秦漢若クハ中古ノ文學ニ止リ　方今彼我交通上ノ實用ニ適セス

かくのべ來つて、對華政策遂行にあたつて、中國に關する諸般の具体的知識—彼ノ地理若クハ風俗人情—の必須不可缺を論じ、古來わが國にうけつがれ來つた中國學を指稱して「支那學」の文字が使用された。しかも、その「支那學」が「徒ニ秦漢若クハ中古ノ文學ニ止リ　方今ノ彼我交通上ノ實用ニ適セ」ざることを痛烈に指摘、さらにつづけて、

依テ速ニ普通ノ支那學ヲ我カ中學ノ學規ニ加ヘ　有爲ノ

子弟ヲシテ彼ノ制度兵勢ハ勿論風俗人情モ亦詳ニ通曉セシメスンハアル可ラス　今ヤ英學ハ殆ント宇内交通ノ文學ニシテ之ヲ我カ中學ニ入ルルハ勿論必要ナリト雖モ更ニ交通上ニ於テ關係ナキ獨逸學ヲ我カ中學ノ科程ニ加ヘ　而シテ政略上軍略上ヨリ又交通貿易上ヨリ其最モ關係ノ大ナル支那學ヲ學科ニ設ケサルハ實ニ解ス可カラサルノ理由ナリトス（傍點筆者）

と論じ、英學、さらには獨逸學との對比の上に立ちつつ、「普通ノ支那學」を中學の教科課程に編入すべしと主張している。獨逸語に熟達、早くよりロレンツ・フォン・スタインと交渉をもち、これがために伊藤博文の隨員として活躍した河島醇にして獨逸學批判の文字あるは注目するにたりるが、[4] それはさておき、「普通ノ支那學」とは少しく奇妙な表現であり、このように現代中國の研究と古典中國のそれとを全く分つことは、吉川幸次郎博士が嘗て指摘された通り、現代中國と古典中國とを全く異質的とする錯覺に基くものではあるが、[5] この文字をかかげることによつて、在來の「漢學」にたいし、「彼ノ制度兵務ハ勿論風俗人情」に關する客觀的知識を高く評價していることは疑ない。それは、あまりにも主觀・ドグマの中に浸り切つた漢學にたいして、現實の客觀的把握を提唱したのであり、ことに、客觀把握に際して、實學的傾向が強く露呈されているのに注意される。若干この問題について致えてみたい。

二

明治期の新興精神、その先頭にたつわが國思想家たちの西洋文化輸入への努力は、漸次、在來の封建思想・文化への痛烈な批判の形態をとり、舊物破壞へとおしすすめられた。すでに、明治八年三月の刊行になる小川爲治著すところの「開化問答」卷下に、漢學の非實用性を難じて、「今かかる實なき學問はさておき、專ら勉むべきは人間普通日用の學問でござる。」（明治文化全集第二〇卷所收）とのべて、功利的實用主義的立場よりする批判が試みられているのは、その第一聲として注目される。この間、安井息軒がやはり同じく明治八年、その著「睡餘漫筆」[6] において、「世の儒者たる者……其少しく才ある者、又都會に住める者は、世俗に聞へやすき詩文を學ひて、少し許の利と名をねむるを以て已が業とし、國を經するの道は絶て講ぜず、今

日才を用ふる世と成ても、他の道に壓されて用を成さざるは全く此故也」としたのは、「經國」の立場に基くものながら、漢學者の內よりする自省の聲として注目に値するのであるが、實用主義的見地に立つ漢學批判はなおひきつづき展開される。すでに緒方洪庵の適塾における蘭學研究を通じてきわめて反漢學的となり、後年、自身も「當の敵は漢法醫で醫者が憎ければ儒者まで憎くなつて、何でも蚊でも支那流は一切打拂ひと云ふことは何處となく定まつて居たやうだ。」（福翁自傳）と述懷した福澤諭吉において、その漢學批判がすこぶる尖鋭化したのも故なしとしない。果然、「文明論之概略」（明治八年）において、「此時に當て日本人の義務は、唯この國体を保つの一箇條のみ、國体を保つとは自國の政權を失はざること」といい、これがためには「人民の智力」を進めるべく、「智力發生の道において第一着の急須は古習の惑溺を一掃して、西洋に行はるる文明の精神を取るに在り、陰陽五行の惑溺を拂はざれば窮理の道に入る可らず」としたが、さらに政府專制を難じて、その漢學との連關に言及、「政府の專制、これを敎る者は誰ぞや、假令ひ政府本來の性質に專制の元素あるも、其元素の發生を助けて、之を潤色するものは、漢學者流の學問にあらずや」とのべ、漢學にたいし、「遺傳毒」の文字を投げつけたが、なお漢學の停滯性を論じて、それが「半は政治上に關する學問」なるにも拘らず、「變通改進の旨を知らざるは、遺憾のことならずや」ときめつけ（卷之五）、變通する有用なるべき斯學にしてその本來の性格を喪失せる以上、これに代るべきものの出現を要請したのである。さればこそ、「學問のすすめ」（明治五—九年）においては、國學とともに漢學をば有閑の學として血祭にあげ、實用の學を主張して次の如くいう。「學問とは唯むづかしき字を知り、解し難き古文を讀み、和歌を樂み詩を作るなど、世上に實のなき文學を云ふにあらず。」「されば今斯る實なき學問は、先づ次にし、專ら勤むべきは、人間普通日用に近き實學なり」いう所の實學とは洋學、とくに英學に他ならない。實學の主張はなおひきつづく。渡邊脩次郎の著した「民情如何」（明治一四年）には、日本農民の現狀にふれ、いわゆる「農民に學問は入らぬなり」という所以を衝いて、「舊來の學問が左程民間に功用なかりしより、今日に至りても、尙ほ斯る誤解を免れ」ずといい、「今茲に學問と云

ふは、此等の迂遠なる學問を云ふにあらず、一通りの習字算術より其以上は、各々其職業に應じ、農用化學又は植物學等の大意を學ばしめたらんには、必ず幾何かの利益を其職業上に得べ」き旨を說き、なお商工業者についても、「其職に應じ經濟學、簿記法、工學、圖引等」を知るべしとして、ただ實際面に習熟するのみで、「新たに理を發見し物を工夫する」科學的立場において歐米の農工商にたいし、甚しく劣勢にあるわが國業者の狀況を指摘、これを補うべきものとして實用の學を說いたのである。舊學問べの批判はさらに文明史家鼎軒田口卯吉もこころみたところ——。その著「日本開化の性質　一名社會改良論」(明治十八年)にいう。「試に思へ、今日吾人仁義の說を知るも、果して何の益がある。吾人左傳、史記等の一字一句を翫味するも、果して何の要かある。吾人詩賦を作り、紀行を漢文に記するも、果して何の利かある。吾人萬葉假名を以て讀み難き文章を作れば、果して何の能かある。蓋し此等の學問文章は、以て閑日を消するの具となすべし、吾人に利益ありとは、言ふ能はざるなり。」「以上の如き學問文章は現時に於ては、殆んど特に廢絕せんとする氣運に際せり。」(田口卯吉全集第二卷三五頁)まさに漢學にたいして、最後の止めを刺さんとするの概があり、舊學排擊の熾烈化する一面、實學への傾倒はさらに加わる。ついに明治二十年、德富猪一郎の左の文字を以て、漢學攻擊は白熱化するのである。すなわちいう。「嗟呼我黨ノ好青年ヨ。好男子ヨ。若シ卿ノ一步ヲ轉シテ泰西ノ自活社會ニ入ラハ。願ハクハ卿ノ二步ヲ轉シテ泰西ノ道德社會ニ入レ。若シ物質的ノ文明ヲ望マハ、更ニ眼ヲ擧テ精神的ノ文明ヲ望メ。」「實ニ封建社會ノ歷史ト其ノ學問ノ歷史トハ。尤モ親密ナル關係ヲ有シ。其ノ存亡興廢ヲ共ニセリ。若シ之ヲ精詳ニ觀察シタラハ或ハ珍奇ノ現象モアラン。吾人ハ唯其ノ互ニ關係アルヲ陳シテ。以テ封建學問ノ變遷ヲ記スルノミ。忠臣ナル哉漢學ヨ。爾ハ其ノ主人タル封建社會ニ殉死シテ、共ニ過去ノ世界ニ葬レリ。漢學ヨ。爾ハ茲ニ永眠セヨ。」(新日本の青年)[7] 「漢學ヨ。爾ハ茲ニ永眠セヨ。」の一言、まことに痛烈であり、漢學はその基盤たる封建社會の瓦壞に伴つて死滅すべしとしたのである。もとより、「新日本の青年」それ自体、安倍能成氏もいわれるように、「青年の元氣と色氣と覇氣ときざとを合せ有し、」「多くの淺薄と直譯臭」とは否みえず[8]、それはこの

漢學批判にもなしとしないが、漢學への論難はここにいたつて殆んど絶頂に達したかにみられる。

三

明治初年以來、いくたびかくりかえされた漢學批判がその極點に達したかにみられる明治二十年はまた、河島書翰の物された年でもあつたことに改めて注意したい。かつて西田直二郎博士は、明治期の第二期として、六・七年ごろより二十三・四年にわたる期間を設定、さらに二分して十七・八年より二十三・四年にいたる間を後期とし、この時期にあつては對外關係、主として國民の外部的發展の意欲旺盛を考えしめることを指摘されたが[9]、あたかもこの時期に物された本書翰は、わが國の正にあるべき位置を攷え、いかに政策すべきかを說き、しかも一介の政論におわらず、對外政策をすすめて現實の教育問題におよんだことにきわめて勝れたものをしめす。もとより、本書翰の如く、清國に關する一般知識にたいして、學の文字を冠しうるかは一應問題となるけれど、われわれの最も興深くするのは、書翰の筆者がかかる知識にたいし、「普通ノ支那學」の稱呼を與え、在來の漢學を「支那學」と呼んで兩者の間に明瞭な一線を劃し、かくして、當時まで殆んど用いられなかつた「支那學」の稱呼を再度まで使用していることにある。ヨーロッパにあつて、シノロジー(Sinology)が舊教宣教師らによつて樹立をみたのは、いうまでもなく、十六・七世紀のことに屬するのであり[10]、シノロジーの字面は當時よりみられたわけであるが、わが國においては漢學もしくは儒學の文字が壓倒的であり、支那學の稱呼は從來たえて用いられることはなかつたのである。

なおここで「支那學」の文字と關連して、わが國における「支那」の字面使用をあとづけておきたい。これに關して、さきに實藤惠秀氏は「日本がからの代りに支那を用い出したのは、最初は新鮮さのため」であつたといい、佐藤信淵(一八五〇歟)を以て、支那の字面の最初の使用者とされたけれど[11]、和田清博士の指摘された如く[12]、つとに新井白石(一七二九歟)は、その著「采覽異言」卷第三に「チイナ、支那」の文字を用いている(新井白石全集第四、八四七頁)。尤も、すでに明版法苑珠林には各頁ごとに支那の文字を印することが指摘され[13]、溯つて、北宋端拱元年(九八八)十月、僧

贊寧によつて上表をみた宋高僧傳卷二には、中印度の人釋極量の傳の中に、「展轉遊化し、漸くにして支那に達す」といい、その割註に、「印度の俗、廣府を呼んで支那となし、帝京を名づけて摩訶支那となす。」[14]とみえ、なお溯つては、唐の慧苑の華嚴經音義に、「支那亦た眞丹という。」とあり、[15]これら中國諸文獻における字面使用の沿革よりするならば、白石以前、この稱呼のわが國における使用の可能性なしとしないけれど、一應白石に使用の古さをみとめてよいであろう。ともあれ、かくして白石によつて一度は使用をみたこの稱呼も、その後、一部蘭學者を除いては一般化しなかつたのであり、[16]そのことは封建期における「漢學」の絶對性のしからしめるところといえよう。

かくして、白石より以後、一部蘭學者を除いては殆んどみ出されぬ支那の字面は、佐藤信淵にいたつて復活した觀があるが、それがさらに「支那學」と熟して漢學のシノニームとされ、なお「普通」の文字を冠してこれと區分したことが問題となるのである。なお、これよりさき、金澤藩士佐野鼎はその遺稿「訪米日記」[17]の萬延元年（一八六〇）九月十二日條に香港上陸をのべた中に、同地の英華學校教頭モリソンに關し「この人は北京の學校に入りて支那學を學ぶこと十七年。爾來康熙字典を英譯したる書を著す」といい、支那學の字面は河島書翰を以て使用の嚆矢とはなしえないけれど、[18]河島書翰にみえるこの文字はその特殊の用法の故に特に注意をひく。

さてそれでは河島書翰における「支那學」の字面はいかなる事情の下に使用せられたか。在來の漢學を「支那學」と名付けて意味曖昧なる舊稱を去り、目下の焦眉の急たる現代中國に關する諸知識を「普通の支那學」と呼んで區別したが、そこには先にみた如き漢學への痛罵はみられず、一應その存在を肯定、ただその非實用性を指摘した本書翰は、さらに「普通の」の文字を加えることによつて、近代中國の現實に關する諸知識を指稱し、かかる知識を漢學より一應低次のものとした。しかもそれは主觀の濁流をよく離脱して現實の客觀視を說いたところ、充分注目に値しよう。もとより、河島書翰の用語については、さきの、歐洲のシノロジーも一應留意される他、なお、東京大學に明治十四年新設の科目「支那哲學」、さらに同十六年に新設の科目「支那經學」の諸名稱も顧慮されるのであり、[19]ことに

後者については、明治十八年九月、造士館教則取調委員にもあげられた[20]河島醇にして、支那學の字面使用との關連は充分豫想せしめられるが、かれがなお、中國の現實に關する諸知識にたいし、わづかに「普通の」との文字を加えつつ、やはり支那學の稱呼を與えているのは如何であろうか。これには固より、學そのものの理解の仕方にもよることながら、なおその他、河島醇その人の育成された教育環境、すなわち薩摩藩獨特の學風に負うことも考えられないであろうか。嘗て山田琢氏は「薩摩の儒學」の一文を草して薩摩儒學の性格を究明、「薩摩學風の變遷も亦多端であつた、」しかも「その根柢を流れる一貫した道は、實用の學といふ觀念であり、島津日新齋の所謂『我が行にせずば甲斐なし』の實踐であつた。薩藩が雄藩にも似ず鴻儒碩學に乏しかつたのも、是に起因する樣に思われる。而して其が亦薩藩學風の特色でもあつた[21]」と結論された。もとより、實用の學の考え方は薩藩儒學に限つたことでなく、寛政三博士の一人、尾藤二州の如き、「百年前は人々學問を實用にせし故、和學漢學といふはなかりしなり、この名あるは學問の衰へたると知るべし」(雜錄)とのべて實用の學を推しているが、しかも實用の學は次第に變貌、中島櫃園の「めづらしき書もあるらし、わがほれる墨も硯も紙筆も澤にぞあるらし、いざ子供、はや引入れよその唐船」との歌にしめされる如く[22]、中國文化・漢學を單なる自己の趣味生活の道具としか考えぬ傾向を多分にもつわが國の人々の間にあつて、薩藩における「實用の學」の傳統はたしかに異色あるものといえる。かかる實學的色彩濃厚な儒學が、少青年期をこの地に過した河島その人—かれ生誕は弘化四年(一八四七)—に影響する所少しとしなかつたであろう。

「學問ノ標的ハ修身齊家治國平天下ノ道理ヲ研究、本末先後ヲ知別イタシ、然テ當時ノ政務奉行候テモ能其任ニ堪候樣ニ心懸專要ノ事ニ候」或は「當時ノ學者ト唱候モノハ今日ノ世事ニ疎ク經濟ノ道ヲモ捨置沙門同樣制外ノ樣ニ心得候モ間々有之候、全ク學問ノ趣意取違候故ト被存候」(安政四年十月、造士館ならびに演武館へ發した學令)[23]と諭した薩藩の實學教育に、河島書翰が負うところを考えて、けだし不合理でないであろうし、ひとしく薩藩儒學の中に育成された重野安繹博士がつとに明治十二年六月、東京學士會院における講演—「漢學宜く正則一科を設け少年秀才を選み清國に留學せしむべ

き論説[24]—において、「方今外交大に開け、就中清國は切近の地に位し、同文同俗の國柄なれば、公事の往復より貨物の懋遷等に至るまで、日増に繁多に赴くは必然の事なり。設令ひ從前我に漢學なき事、歐學なきが如くならしめば、必ず急に幾員の留學生を派遣し、其文學事情に通曉せしめざるを得ず。」とし、「留學生の取扱について、「年齢十三四、資性敏捷にして、普通漢學を卒業せし者、毎歳十名以上を選み、留學の期を定めて十年以上となし、」「而して經史子集悉く彼の讀法に遵ひ、傍ら其官話を學習せしめ、雅俗文体の日用を辨ずるものは、務て兼修するを要すべし。生徒業成り歸朝するに及び、官校に入り正則を以て中學以上の生徒に教授し、漢文を和解して變則以下の讀誦に使」すべしとしたのと對比して興深いものがある。

四

河島書翰の物された當時、本邦教育界の傾向が國粹主義を濃厚に帯びていたことは否まれない。すでに明治十四年六月、文部卿福岡孝悌は小學校教育心得を布達、「大に儒教主義の教育を奬勵」したが、さらに同十五年五月、東京大學に古典講習科の設置されたのも、ひとしく國粹保存の目的に出で、[26]つづいて翌十六年二月、設立をみた支那古典講習科もひとしく國粹主義運動の一具体化に他ならなかつた。[27]もとより、明治十五年、第一回繪畫共進會規則中における洋畫出品禁止の如き、反動的國粹主義すらも露呈されたけれど、[28]明治維新直後にみられた如き偏狹な神道主義、皇道主義の再現はもはや時代に適せぬのみか、むしろその逆とすらなつた當時にあつて、盛行せる歐化思想・實利的教育を調和し、これらを綜合しうる國粹主義でなくしては到底時代に即應しえない。[29]しからばいかにして國粹主義が外來の實用主義と調和しえたか。高橋俊乗氏はこれに關し「元來『學制』以來の實用主義は學制頒布に關する『被仰出書』にもみえるやうに、個人の功利を專らとしたもの」であつたが、「當時の國粹主義は實に從來の個人的實利主義を國家的實利主義に轉換せしめたもの」と說き、この轉換・調和せしめられた教育原理が「國家主義」であり、國家主義の教育制度の確立者は他ならぬ森有禮であつたとする。[30]實に、森の教育スローガンの根柢を流れるものは「小學校尋常中學校は中等以下のものを教育する所なれば、其教養の

目的は普通實用の教育に外ならず」（明治二十一年、森の宮城縣巡視の時の演説）[31]とする實用の學の主張であつたといえよう。嘗て大久保利謙氏は森の學校令と教育勅語發布とを以て「國民教育の確立」とし、森の學制改革において「國家主義教育の樹立」をみたとされた。[32]もとより、教育原理の研究における著しい自覺は教育勅語發布以後に屬するが、すでに明治十八年、開發社が設立、教育時論を發行して教育原理の討究を試み、研究態度そのものにも變革の機運がおこりつつあつた。[33]既述の如く、明治十八年、造士館教則取調委員にあげられた河島醇にして、新教育、教育方針の新轉換について、必ずや考えるところがあつたろう。「普通の支那學」のもつ内容の如き、教育に關する達識ならずして考えられるものではない。政治的意圖濃厚ながらも、中國大陸の現實に卽した研究をとなえ、これを中學の教科におりこまんと提案したことはそれ自体きわめて肝要であろう。

すでに明治十五年七月、京城における大院君事件の勃發は極東の空に暗雲を兆していた。十八年にいたつて、日韓講和條約、ついで天津條約の成立をみたけれど、暗雲なお晴るべくもなく、[34]福澤諭吉の如き、大院君事件に先立つて早くも「政府何ぞ奮て大に進まざるや」の題下に、極東問題に際するわが國の軍事力の檢討を試み、[35]これより先にも、明治十二―三年の交、すでに東洋經略論を盛んに說いたが、[36]大院君事件の直前、明治十五年四月の刊行になる生島肇編「政談討論百題」にはその一としてr「我國朝鮮國の獨立を助くるの可否」があげられたし、[37]降つて明治十八年、大井憲太郎らの自由黨大阪事件あり、同年、樽井藤吉の「大東合邦論」出で、小野梓はこの前年に「論淸韓之處置」[38]を書き、またこの年、尾崎行雄によつて「對淸對韓論策」[39]がたてられるなど、自由主義者らの大陸えの關心深きを加える一方、朝鮮における風雲急なる際、明治十八年、薩摩出身陸軍軍人の間における「征淸主義」擡頭の事實があり、これは三浦觀樹らの努力により打破されたが、[40]やはり同年、天津條約締結の直後、陸軍大尉福島安正が提唱せし軍事意見書六項は、中に「支那の形勢言語に通ずる士官を養成するの件」および「將官を（淸國に）派遣して實地を目擊せしめられたき件」を含むものであつたし、[41]福島はつとに明治十三年に編纂・刊行せし「隣邦兵備略」において淸國を

假想敵として注意しているのである。[42] しかも福澤は先の論文につづけて、翌十六年五月、「支那人の擧動益怪しむ可し」[43]として強硬論を吐く一方、同年七月、「支那行を奬勵すべし」として、「殊更支那は比隣の國なり、今後商賣上に政治上に活機を爭ひ輸贏を決し合しては唇齒となり離れては好敵となるは唯だ此國を以て然りとなす、支那の我邦に於ける既に斯る關係あれば我邦の人士は其風俗人情を察すべきは勿論」[44]なりとし、すでに明治十二―四年にわたり、中國研究のため慶應義塾に中國人を招いて中國語學習をはじめている。[45] 一体、歐米諸國を對象とする東洋經略論は、すでに幕末にあつてかなりの進展をしめしたが、實現のチャンスなく、國家自衛の手段としての進取經略論の實施はこれを維新後にゆづらざるをえなかつた。[46] 明治四年、江藤新平がその「對外策」において「夫支那は亞細亞の爭地なり。不得之者は危く、苟も之を得れば亞細亞の形勢を占領するなり。」「夫支那を取り、亞細亞の形勢を占め、賢に任じ、能を使ひ、政治を整ひ、民心を安じ、終には米、魯、孛と世界を可爭なり」[47]と略取論をとき、さらに同六年、中國分割論をのべ、[48] 今日の急務は「帝國の版圖を大陸に擴張」「以て第二維新の實を擧ぐるに在り」としたのは、[49] 明治六年の征韓論者の一人の見解として注目すべく、征韓論が維新後における進取經略論の最初の波瀾として擡頭、ついに破れ去つた後も、進取經略論は決して消滅したわけではない。朝鮮問題をめぐる日清關係が險惡の度を加えるに從つて、進取經略の考えはわが國の人々の間に強く意識されるにいたつた。河島書翰のいわゆる「血鐵の政策」――すでに本書翰の中にもビスマルクの政策にふれ、血鐵の文字にたいして、「一刀兩斷兵力ノ意」と注しているように、この用法が鐵血宰相の一八六二年、プロシヤ下院豫算委員會における演說中の文句 "Eisen und Blut" よりきたことは疑ない――は、若干の人々の考えるところとなつたのである。かくて、國民黨々首谷干城が明治二十年初にものした意見書において、歐化主義を排擊するとともに內政改革・軍備擴張を說き「然ラハ則今日ノ時宜シク如何ノ政略ヲ取ルベキカ。曰ク、斷然從來ノ主義政略ヲ廢絕シ、他ニ依賴スルノ念慮ヲ拋擲シ、內政ヲ改革シ、兵備ヲ嚴ニシ、此ニ溝渠ヲ深フシ、此ニ城堡ヲ高フシ、外ニハ信義ヲ表シ、威嚴ヲ正フシ國光ヲ汚スコトヲナサズ、內ニハ民ト共ニ守ル

ノ志操ヲ催揮シ、以テ歐洲ノ變亂ヲ待ツベシ、歐洲ハ早晩必ズ干戈破裂シテ、馬蹄中原ヲ蹂躙スルノ期アルベシ、我國元ヨリ歐洲ノ變亂ニ干與スベキニ非ズト雖、歐洲ノ變亂ハ、其波及スル處甚ダ廣ク、爲メニ東洋ノ諸國ヲ動搖シテ、東洋ニモ亦兵亂ヲ生ズルニ至ルヤ必セリ。故ニ我ガ國ハ歐洲諸國ニ向テ、輕重ヲナスコトナキモ、其東洋諸國ノ中ニアリテハ、牛耳ヲ取テ盟主タルヲ得ルモノナレバ、コノ時ニ當リ我ガ國ニシテ、堅牢ノ兵艦二十餘艘精鋭ノ陸軍十萬ヲ擁セバ、衡ヲ東洋ニ爭ヒ、重ヲ歐洲ノ强國ニ示スヲ得ベシ」(谷干城意見書)[50]としたのは、河島書翰に「斷然清國ト戰ヒ、「速ニ勝利ヲ得　以テ彼ト共盟シ　我東洋將來ノ政策ヲ共計セスンハ非」ずとしたのと、その意圖するところきわめて相近い、なお、少しくおくれて、翌二十一年七月、北村三郎はその著「東洋策」において、英・獨・露・佛諸國の東洋政策をのべ、歐洲諸國の兵備をわが國のそれに對比したのち「日清ノ關繫ハ我東洋ノ大勢ノ由テ定マル所」、しかも兩者の提携は、「果シテ今日ノ日清兩國ニ望ムベキ乎、是レ果シテ東洋ノ盟主ヲ定メズシテ、其望ヲ達スベキ乎」、「故ニ今日東洋ノ急務トスル所ハ日清兩國ノ關繫ヲ定ムルニアリ、苟モ日清兩國ノ關繫ニシテ定マラザレバ、一致同盟ノ方向ニ進ムコト能ハズ、一致同盟ノ方向ニ進マザレバ安ゾ東洋ノ大勢ヲ一振シテ共ニ歐洲强國ニ對立スルノ實力ヲ示スコトヲ得ン哉」[51]と論じて、日華兩國の「一致同盟」をとき、やはり同年夏、菅沼貞風は「新日本の圖南の夢」において、「吾人は既に支那を引て我國の同盟となし、朝鮮暹羅を助けて我國の與國となし、以て東洋の勢力を連結」[52]すべしとしたのも、前後一連の經略論とみなしえようが、[53]明治十三年、興亞會の設立以來、擡頭し來つた經略論はここにいたつて、めざましい展開をしめしたのである。[54]

なお、これら經略論の進展とあわせて、中國に關する地誌・現代事情の類の相つぐ刊行も注目をひく。すでに明治初年以來、福澤諭吉の「掌中萬國一覽」(明治二年)に中國關係の記事のあるのを始として、中村一翠記述「五大洲誌略」(明治五年)、池上四郎・武市正幹・彭城中平「滿洲視察復命書」(同上)、永峰秀樹「支那事情」(明治七年)、沖正修編「支那地誌略」(同上)、假名垣魯文「現今支那事情」(明治八年)、竹添井井「棧雲峽雨日記」(明治九年)、さらに金子彌兵衛編「支那總說」(明治十四年)、岸田吟香編

「清國地誌」（明治十五年）、曾根俊虎「清國漫遊誌」（明治十六年）、尾崎行雄「遊清記」（明治十七年）など相つぐ中にあつて、明治十七年一月、下村脩介が凡例をかき、同年十二月、參謀本部長山縣有朋が叙をものした參謀本部管西局編「支那地誌」二十卷[55]—刊行は明治二十年—は注目されてよい。この書は、その凡例に「此書ヲ編纂スルヤ引用スル所ノ書籍無慮數十部ニ下ラス　之ニ參スルニ我邦人及ヒ歐米人ノ紀行報告ノ類ヲ以テス」「而テ幅員人口ハ西曆千八百八十二年英人金氏著スル所ノ亞細亞全志ニ據ツテ之ヲ斟酌シ土地山河ノ名稱ハ大清一統志ニ據ル」とみえるによつて明かな如く、當時としてかなり周到な編纂法がとられ、その内容は、中國本土のみならず、塞外諸地域におよんでいる。參照書目の中、英人金氏の亞細亞全志とはおそらく、William A. P. Martin "Nouvelle Géographie Uni" "verselle" VII. L'Asie Orientale[56]と考えられる。本書刊行の意圖は、山縣の叙文に「かの地理を講ずるもの、よくこの書をよめば、すなわちただにその山川風土人情物産一切のこと、きわめて憾なきのみならず、また善隣の一助たらん」とみえる如く、現代中國に關する諸般の知識を普及せんとしたことに、その一端がみとめられるが、從來の個人の著作とは著しく異り、官製、しかも軍部の手になるものとして、上からの意圖が色濃く滲み出ているところ、當代の中國關係文献として注意されるが、明治十七年編、同二十年刊行になるこの書が、澎湃として起り來つた經略論との間にもつ關連性はわれわれの見逃しえぬところであろう。

中國問題が經略論として展開をとげる一方、官學における中國研究の實態は如何であつたか。明治十九年十月、明治天皇の帝大行幸・天覽ののち、こえて十一月、大學の模様を元田永孚に告げさせられ、元田はこれをしるした中に、「和漢ノ學科ハ修身ヲ專ラトシ、古典講習科アリト聞クト雖トモ、如何ナル所ニ設ケアルヤ過日觀ルコト無シ」[57]とあるが、文部省當局も明治二十年、その年報に「文科大學ハ本年更ニ史學、英文學、獨逸文學ノ三科ヲ加ヘ、從來置ク所ノ哲學、和文學、漢文學、博言學ノ四科ヲ合セ總テ七科トナセリ　而シテ本學ハ本邦舊來ノ學風ヲ一變シ　改進ノ方向ヲ取ルニ緊要ノモノナレハ　力ヲ用フルコト他ノ諸學ニ讓ラスト雖モ　世間未タ本學ノ急要ヲ感セサルモノノ如

ク　學生ノ數甚タ少ナクシテ僅ニ十九名ニ過キサルノミ」[58]

との痛嘆を發せざるをえなかつた程、文科大學は沈滯の空氣きわめて濃厚なりしことを思わねばならない。漢學科またその例外たりえなかつた當時、河島書翰が在來の漢學の存在を一應肯定してこれに「支那學」の稱呼を附するとともに「普通ノ支那學」の名稱の下、中國の客觀的具体的把握を力說したことは、いわば漢學と經略論との連繫をめざすものともいえる。もとよりそのいうところ、就中「血鐵ノ政策」の如き、充分省察の對象たるべく、無批判に觀過しえないが、しかもそれら一切をあげて、河島醇その人の人間体驗と思考成果との結集たることを考えねばならない。

まさしく明治二十年という年は、明治期における一轉期の中に位した。さきにひいた西田博士所說もさること乍ら、かつて柳田泉氏は、いわゆる海國日本の意識化が明治十八年より二十年にかけてのころであつたとされたのであるが、[59] これを裏づけ、さらにさきの經略論に連るものとして、河島書翰に後るること半歲、明治二十年七月、さきの自由黨々首、板垣退助のものした「亞細亞貿易趣意書」がある。これは、「さきに一度び自由黨を解いて海南に歸臥せし」板垣が「股肱の同志と議して新たに亞細亞貿易商會を創立」「一には以て東亞の開發に任じ、一には以て主義の擴張に資せんと欲し、月を經て計畫漸く熟」したによつて頒布したるものであるが、その中にいう。「我亞細亞洲中にして各國交際の親密ならざるは貿易の道開けざるに由る。故に貿易之を盛んにするは亞細亞各國の交際を修るに於て裨益する所少しと爲さず」つづいて、中國における露英二國の利權擴張のすさまじき勢いをのべ、「我邦は獨り茫然自失敢て亞細亞大陸に向て國權を爭はず、坐して其弊を受くるのみ。晩近清國貿易の說漸く行はれ、新たに社を結び彼地に往て業を營むの事あるを見るは誠に喜ぶべきも、我邦の商權を擴張するに至ては其遺憾とすべき者頗る多と爲すなり」とし、「亞細亞の貿易を盛んにし以て商權を擴張せば、我國權をして重からしむることを得べし」[60] と結んでいる。國民黨首領谷干城、さらには谷と提携する河島醇の、さきの主張と相對して、自由黨々首板垣退助の東洋貿易論は、やはり國權論を含みつつも、きわめて興深い。相つぐ經略論が、ついにはきわめて武斷的軍事的な方向へとつきすすんだ中にあつて、これは一つの平和的解決の途を拓いたものとい

えようが、武斷的なるが故に今日において充分批判檢討さるべき問題をいだきつつも、なお、中國研究の具体化をとき、中國學の客觀性を志向したところに、河島書翰の意義は今日なおみ直さるべきものをもつであろう。

（一九四九年四月稿、一九五一年六月第三稿）

補註

① 該書翰は筆者の親族小野道一のコピーせしところ。小野は當時、高知縣會にあつて、國民黨々首谷干城の下に活躍、翌二十一年三月以降議長をつとめた。谷干城の「日錄」の明治二十二年十一月九日條にいう「過日來薩人河島醇氏頻りに社友に交際を求む、遂に會す」「（河島氏云ふ）今後貴樣等の社中と共に所謂國民主義を取らんと欲するものなり」（「谷干城遺稿」上、八二〇頁以下）と。おそらくこの間の交友關係にあつて、該書翰をみるをえて、そのコピーをなしたとみられる。

② 高橋是清氏「自傳」二七九—八一・二七七・二九四—八頁、新聞集成明治編年史六・七卷など。なお、新版大日本人名辭書にのせた河島醇略歷をあげると「鹿兒島藩士河島新五郎の長男、弘化四年三月鹿兒島長田町に生る、幼名新之丞、のち醇と改む。明治七年はじめて外務書記官に任じて獨露墺の各公使館に轉勤、その間各地の大學に入り、政治・經濟の學科を修めて歸朝、ただちに大藏權大書記官兼外務權大書記官となり、明治十五年、伊藤博文の歐洲派遣に隨い、その後も再三渡歐し財務事務を調査、十八年、大藏省參事官となる。當時醇はわが憲政の前途および討議會方策につき屢々當路者に進言して容れられず、斷然官を辭し大いに非藩閥論を鼓吹し、進歩的政派の合同を圖る。」（七五〇頁）とみえる。

③ すでに初代駐日公使何如璋はその赴任日記において、西歐の現狀を戰國時代中國の形勢に對比せしめ（實藤惠秀氏「明治日支文化交渉」四四頁）、清末の人、廖平が當代の中國を戰國の鄭に比したことも（本田成之博士「支那經學史論」四〇一頁、小島祐馬博士「六變せる廖平の學說」支那學二卷九號）、これと相應ずるが、なお、清國駐日副公使張斯桂は萬國公法の序をしるした中に、「歐洲の形勢を指陳し、瞭然たること掌上の螺紋の如く、春秋列國を以て歐洲に比」したといわれる（王韜「扶桑遊記」小方壺齋輿地叢鈔第十帙所收）。

④ 吉野作造博士「スタイン・グナイストと伊藤博文」（明治文化研究所收）參照。

⑤ 「支那學の問題」四二頁。

⑥ 本書は明治八年十一月朔、七十七翁安井息軒の序を附す。日本儒林叢書隨筆二所收。

⑦ 太陽增刊、明治名著集所收、四二六・四三六頁。

⑧ 「明治思想界の潮流」時代と文化所收、一五六—七頁。

⑨ 「日本文化史序說」六二〇—一頁。

⑩ これについては、田中萃一郎博士「支那學の沿革」（東洋學報八—九卷、同博士史學論文集に再錄）・石田幹之助教授「歐人の支那研究」第六章・後藤末雄博士「支那思想のフランス西漸」など。

⑪ 「近代日支文化論」（東亞文化叢書）一三五頁。

⑫「支那及び支那人という語の本義について」東亜史論叢所收。

⑬平岡武夫氏「經學頌歌」京大學園新聞五四號、一九四七年十月二十日附。

⑭桑田六郎博士の御示教による。宋代史料としてはなお、法雲の飜譯名義集・宋史卷四九〇天竺傳などにもみえるが、宋高僧傳卷一、釋跋日羅菩提の傳には脂那とみえる。

⑮小島祐馬博士の指摘されしところ（「狩野先生の學問」東方學報一七冊一五二頁）。

⑯和田博士前掲論文を參照。

⑰金澤文化協會刊、昭和二十一年。

⑱なお、有働賢造氏「江戸時代と大阪」（三九七—八頁）に赤司新三郎著「新商人」を引き、明治二十年ごろの有様をしるした記事として、「高名手を唖して取るべきとは、支那學を脩めたる書生の口吻のみと信じたりしに、思ひきや西書を見ても尚此政治病の癒へざるとは」とある中に支那學の字面がみえるが、同書は寓目の機なく、著作年次明かでない。

⑲尤も、これら講座名の成立事情は詳でない。文部省年報（明治十四年同十六年）・「東京帝國大學五十年史」・「東京帝國大學學術大觀」などにも説明を缺く。

⑳「新聞集成明治編年史」第六卷一四六—七頁にひく東京日日の記事による。

㉑「近世日本の儒學」所收、七四九頁。

㉒以上は平岡武夫氏の昭和十五年度京大講義「尚書の研究」に引くところ。

㉓中村光氏「江戸時代の科學政策」所引。

㉔史學論文集下卷第七編漢學論考に收む。

㉕なお、重野博士は別に、「漢學と實學」と題する一講演（史學論文集上卷）においても、清朝の實學をのべたにつづけて、是からの漢學は「時の用」をなすべく、それには、書物に加えて「地理から產物から」現地の實際知識を深むべく説いている。ただしこの講演のなされた年次明かでない。

㉖小中村清矩博士「古典講習科開業演説案」（陽春廬雜考卷之八）參照。

㉗高橋俊乘氏「日本教育史」ならびに「日本教育文化史」參照。

㉘石井柏亭氏「日本繪畫三代志」七六—七頁。

㉙山路愛山がその「英雄論」（明治二十三年）に、十年代より二十年代にかけての國粹主義擡頭につき、つぎの如くのべたのはこの意味で參照される。「勿論曉近我人心が少しく內に向ひ、國粹保存の説が歡迎せらるる現象は見ゆれど、是唯我人民が小兒然たる模倣時代より進んで批評的の時代に到着したるの吉兆とも見るべきものにして云々」（愛山文集」所收、二頁）。

㉚「日本教育文化史」五六九—七〇頁。

㉛玉城肇氏「明治教育史」一三九—一四〇頁に引くところ。

㉜「明治時代の教育」岩波講座日本歷史所收、四二頁以下。

㉝小西重直博士全集第二卷「現今教育の研究」三五六頁。

㉞この間の經緯については、田保橋潔氏の諸著—「近代日支鮮關係の研究」（京城帝大法文學部調査冊子第三輯）・「近代日鮮關係の研究」第四編、さらに「日清戰爭外交史研究」—、ならびに信夫淳三郎教授「陸奥外交」など。

㉟「續福澤全集」第一卷所收。

㊱石河幹明氏「福澤諭吉傳」第三卷、第三八編ノ第二、東洋經略論。

㊲宮武外骨氏「明治演說史」一〇七頁。

㊳「小野梓全集」所收。

㊴「尾崎行雄全集」第五卷所收。

㊵「觀樹將軍回顧錄」

㊶「福島將軍遺蹟」二五六頁。

㊷史學雜誌二六編二號一九頁にのせた中山久四郎氏の講演要旨による。

㊸「續福澤全集」第一卷所收。

㊹同右所收。

㊺石河氏「福澤諭吉傳」第三卷、三八編ノ二。

㊻井野邊茂雄博士「歐米諸國を對象とする進取經略論の發展」(東西交涉史論下卷所收)。なお、この問題については、向居淳郎氏「幕末に於ける支那經略論の發展とその性質」(史林二五—四・二六ノ一)參照。

㊼「西南記傳」上卷附錄六一頁以下。

㊽的野半介「江藤南白」下卷二八九頁。

㊾同右二八八頁。

㊿明治文化全集第三卷正史篇下卷所收、名家意見書四六五頁。

(51)秋山謙藏氏「日支交涉史研究」六四二—三頁に引くところ。

(52)岩波文庫版三二頁。

(53)なお、宮崎龍介によれば、宮崎滔天が中國革命運動に志したのは明治二十年ごろからのことといい、そのころ滔天は、兄彌藏とともに「世界の現狀の不合理を改めるにはまづ中國の革命を斷行、その力によつて世界を理想的に改革するのが最も自然であり、實現可能だと考えていた」という(「三十三年の夢」に附した宮崎龍介「父滔天のことども」二九四頁。これまた前記一連の經略論のシリーズに加えられよう。

(54)興亞會については、平野義太郎氏「太平洋の民族・政治學」二五頁、尾佐竹猛氏「明治大正政治史講話」附錄六の二など參照。

(55)京大文學部桑原文庫藏本による。

(56)H. Cordier, ; Bibliotheca Sinica. Vol. I. 98 による。

(57)牧野謙次郎氏「日本漢學史」二七三頁に引く聖喻記。

(58)文部省第十五年報四九頁。

(59)「海洋文學と南進思想」四—五頁。

(60)「自由黨史」下卷三八八頁以下、および「板垣退助全集」五九頁以下。なお、「自由黨史」には「有限責任亞細亞貿易商會假規則」を收む(下卷三九九—四〇五頁)。

附言　本稿成るに當つて、阪大木村教授は御多忙中にも拘らず、御披閲の上、種々御助言を賜つた。ここにあつく謝意を表するものである。

A MODERN JAPANESE FORERUNNER IN CHINESE STUDIES

By Seiro Okazaki

At the beginning of the Meiji era the traditional Japanese school of Chinese studies became the object of severe critism as a result of the introduction of western method of learning and science, and the culminating point of criticism was reached in 1887 by Soho Tokutomi. At about the same time Jyun Kawashima who was then staying in Germany wrote a letter in which he described the international, especially Far Eastern, situation—Sino-Japanese relations—and urged his country-men to acquire more concrete knowledge about China and the Chinese people instead of old-fashioned Kangaku (sinology). He insisted in adopting "universal sinology" in the middle school curriculum, declaring "it is an urgent necessity to educate promising youug Japanese not only in the political institutions and military strength of China but even in the customs and usages of the Chinese people." He attacked the prejudices of the old theoretical school of Chinese studies, advocating a new method of Chinese studies with a view to developing an objective method of studying China. There are, of course, some weak points in his view, but it is interest to observe how Kawashima who had been educated in "kangaku," or the traditional Japanese school of Chinese studies became to advocate the modern western method of studies.